

## ○プログラム名：血液内科後期臨床研修プログラム

血液内科というと特殊な疾患ばかりを扱うように受け取られがちですが、血液内科（血液腫瘍および血液一般）では内科系疾患のほとんどの臓器にわたる疾患を網羅して研修することができます。すなわち血液疾患および合併症併発例を経験することにより、内科9分野（消化器、循環器、内分泌・代謝、腎臓、呼吸器、血液、神経、アレルギー・膠原病、感染症）のほとんどの分野を経験することが可能であると同時に、外科転科症例、剖検症例も豊富に経験することができます。血液内科の特徴は多岐に渡る豊富な知識と技能を修得することが可能であると同時に、最先端の医療技術・研究にも携われることです。

## ○血液内科における血液領域以外の症例

消化器：節外性リンパ腫（消化管浸潤例、肝原発リンパ腫など）

循環器：心毒性を有する抗がん剤治療における循環器マネジメント

内分泌・代謝：抗がん剤によるSIADH、糖尿病、甲状腺原発リンパ腫など

腎臓：抗真菌剤や抗がん剤による腎毒性のマネジメントと対策

呼吸器：呼吸器感染症、血液関連呼吸器疾患（B00P, PAP など）

神経：中枢神経浸潤例、中枢神経系感染症、末梢神経障害など

アレルギー・膠原病：ITP/AIHA/SLE、薬剤アレルギー、膠原病関連リンパ腫など

感染症：発熱性好中球減少、ウイルス感染症、移殖症例

	3年次	4年次	5年次	6年次	7年次		内科 専門医	血液 専門医	医学 博士
					血液専門医 試験				
		内科認定試験			専門医試験				
内科専門 医・血液専門 医コース1	専門研修	専門研修	研修協力病院 (内科総合あるいは 専門研修)	専門研修	専門研修	研修協力病院 (内科総合あるいは 専門研修)	○	○	×
内科専門 医・血液専門 医コース2	研修協力病院 (内科総合あるいは 専門研修)	専門研修	専門研修	専門研修	研修協力病院 (内科総合あるいは 専門研修)	研修協力病院 (内科総合あるいは 専門研修)	○	○	×
大学院血液専門 医コース1	内科総合・ 専門研修	大学院・専門 研修	大学院・専門 研修	大学院・専門 研修	大学院・専門 研修	研修協力病院 (内科総合あるいは 専門研修)	○	○	○
大学院血液専門 医コース2	研修協力病院 (内科総合あるいは 専門研修)	大学院・専門 研修	大学院・専門 研修	大学院・専門 研修	大学院・専門 研修	研修協力病院 (内科総合あるいは 専門研修)	○	○	○
大学院血液専門 医コース3	大学院・専門 研修	大学院・専門 研修	大学院・専門 研修	大学院・専門 研修	研修協力病院 (内科総合あるいは 専門研修)		○	○	○

	3年次	4年次	5年次	6年次	7年次		内科 専門医	血液 専門医	医学 博士
臨床腫瘍 コース 1	内科総合・ 専門研修	研修協力病 院（内科総 合あるいは 専門研修）	専門研修	腫瘍専門 （腫瘍3臓 器）	腫瘍専門 （腫瘍3臓 器）		○	○	
臨床腫瘍 コース 2	専門研修	研修協力病 院（内科総 合あるいは 専門研修）	専門研修	腫瘍専門 （腫瘍3臓 器）	腫瘍専門 （腫瘍3臓 器）		○	○	

基本的なコースを示しますが、年次ごとの組み合わせについては個別に相談ください。研修協力病院として、国立がんセンター（築地）、都内の血液専施設にも短期研修可能です。留学先では2006年度にはメモリアル・スローンケタリング（ニューヨーク）、マウントサイナイ（ニューヨーク）に留学中です。研修協力病院（内科総合）として、宇都宮済生会病院（宇都宮）、厚生中央病院（目黒）などでの研修を予定しています。

#### 【研修方針】

白血病，悪性リンパ腫などの造血器腫瘍，再生不良性貧血を含む難治性血液疾患の診療に携わる血液専門医の育成を最終的な到達目標としています。ただし，血液疾患の診療には，内科領域全般の幅広い診療能力が不可欠です。白血病患者の治療を例に挙げても，感染症に対する豊富な知識や心臓，肺，肝臓，腎臓を含めた臓器不全の迅速な対応が求められる診療科であることは明らかです。したがって，general physicianとしての基礎固めをしっかりと行った上で，血液専門医としての知識や診療技能が習得でききるよう，可能な限り個々の要望・経験に則した個別の研修プログラムを組んでいます。また，研究推進能力を上げる指導も行っています。当科は血液疾患の診療における拠点施設として全国トップクラスの豊富な症例数を有し，造血幹細胞移植も実施していることから，血液疾患全般の診療技能をバランス良くかつ効率的に習得することが可能です。

#### 【後期研修の実際】

血液専門医育成のための後期研修期間は原則的には4年間を設定し，前期1年間と後期3年間の2段階で研修プログラムが構成されます。しかし，卒後3年間以上の臨床経験を積まれた方は後期3年間の研修プログラムに進みます。（個々の希望により流動的に変更可能ですが，最終的には血液専門医の資格は取得していただきます。また，血液学会認定血液専門医受験資格には内科学会認定内科医の取得が前提となっていますので，当然この資格も取得しなければなりません。）

##### 1) 後期臨床研修-I（卒後3年目）

初期研修を受けた施設によっては血液内科に従事することで，認定内科医の受験資格を満たす症例を経験することは可能な場合もあります。従って血液内科だけを勉強したいという要望にも対応可能です。将来性を考慮すると卒後3年目は経験が不足している科をラウンドすることも可能です。また，臓器別の縛りを越えて総合的に内科全般を研修したい方には，関連病院への1年間の出張も調整します。これは強制的なものではなく，個々の要望に対応したものです。（希望者がいれば厚生中央病院，済生会宇都宮病院，さいたま市立病院などに適宜1年間の後期研修を依頼しています。各種内視鏡検査，エコー検査等の習得も可能で，密度の濃い後期研修ができることから研修医には好評です。）

この間最低1回以上は内科学会関東地方会あるいは日本臨床血液学会例会で症例報告を行い、ケースレポート作成の指導を受けます。この作業は、一つの症例を深く多角的に考察する態度やプレゼンテーション能力を身につける上で効果的ですし、将来、学位論文を書く際の基礎固めにもなります。さらに、学会発表およびケースレポートの作成は3年後の血液専門医の受験資格でも必須条件となります。

## 2) 後期臨床研修-II (卒後4年-6年目)

内科全般の知識・臨床技能を習得した後、血液専門医としての研修を開始します。

当科の研修内容は日本血液学会血液専門医研修カリキュラム内容が満遍なく網羅されています。(詳しくは日本血液学会ホームページ <http://www.jshem.or.jp/>を参照して下さい。)指導医(血液専門医)と初期研修医と3人で一組の診療チームが編成され、常時平均8名から9名の血液患者を担当します。3年間で主な血液疾患の診断、治療が単独で実施可能となり、また、血液専門医の資格を取得することを目標とします。この間、計8ヶ月間は造血幹細胞移植グループのスタッフとして移植症例を担当することになります。

毎週水曜日午前にはmorning conferenceが行われ新入院患者のプレゼンテーションならびに入院患者全員の検査計画・治療方針が検討されます。その後、病棟回診が行われます。また、毎週木曜日午後は血液スライドカンファレンスが行われ、各症例の血液標本が供覧されます。月1回は病理診断部との定例合同リンパ腫カンファレンスが開催され、当科でリンパ節生検が実施された全症例の病理所見が臨床経過と併せて検討されます。その他、症例検討会、セミナーや勉強会が頻回に開催されます。

これと並行して臨床のみならず、臨床研究や分子生物学的手法を用いた基礎研究にも積極的に取り組んでもらい、将来的には医学博士を修得するように指導しています。

### 【取得可能な資格】

日本内科学会認定内科医、日本内科学会認定内科専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本臨床腫瘍学会専門医

### 【経済面でのサポート】

後期研修が有効に行われるには、安定した収入の確保が不可欠です。後期研修期間中は大学病院より支給される給与に加えて、アルバイトは医局で責任をもって確保し、安定した収入を保証します。(アルバイト当直は翌日の業務に支障を来たすため可能な限り外来業務を中心としたアルバイトを、個々の臨床経験・能力に則して医局より斡旋します。)

### 【大学院(卒後3年目以降)】

卒後3年目以降は内科学第一講座の大学院に進学し、研究活動を中心に行い学位を取得すると同時に血液専門医を目指すことも可能です。希望があれば学位取得後は国外留学も可能で、留学先より給与が支給され通常2年から3年間の留學生活が経験できます。

血液内科は診断から治療までを一貫して責任をもって実践する科です。化学療法や移植の臨床技能も習得可能で、臨床腫瘍専門医としてのキャリアも積めます。かつては“不治の病”と言われてきた白血病も、その多くの症例で治癒が望める程の急速な進歩を遂げてきました。さらにより高い治癒率を目指し、そのための日々の地道な努力と研鑽をいとわず、患者の方々の喜びを共有できる方々を私達はお待ちしています